

〔文学篇〕

【注釈】

《醒世姻緣傳》（第 25 回）訳注（其四）

植田均、石亮亮、王姝茵、鐘麗華、張恩培
徐明月、張秋韻、王 瑶、張婉清

Notes to *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chapter 25.vol.4)

Hitoshi UEDA, Liangliang SHI, Shuyin WANG, Lihua ZHONG, Enpei ZHANG
Mingyue XU, Qiuyun ZHANG, Yao WANG, Wanqing ZHANG

要旨

Xingshi Yinyuan Zhuan is a full-length novel with 100 rounds, written in Shangdong dialect. Its writer is from Shangdong Province but his name and life story still remain unknown. We annotate in the words/ phrases the novel and include ‘comparison’ this time. Modern Chinese Research Class students from Kumamoto University are investigating all the words/phrases occurring in the representative works produced in northern mandarin area in Qing Dynasty and currently are working on all the words/phrases from *Xingshi Yinyuan Zhuan*. That is to say, the essay aims to expound ‘the rate of a certain word/ phrase corresponding to its meaning’, and researches on the quantitative linguistics with figures counting frequencies.

Textual Research of *Xingshi Yinyuan Zhuan* from Hu Shi (1993) and Huang Suqiu (1981) contributes greatly to the annotation. Recently the Historical Evolution of the Dialect of *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Chao Rui, 2014) and Dialect Vocabulary Dictionary of *Xingshi Yinyuan Zhuan* (Hitoshi Ueda, 2016) have been published one by one.

キーワード (Keyword): 近代漢語 口語 書面語 方言 記音字

本訳注の書式、文字の字形・字体の入力形式、資料等の略号は『文学部論叢』第 107 号の通りである。即ち、用いたテキスト（影印本）で“着”“却”となっていれば“著”“卻”とはしない。当時の原貌を忠実に表す為である。なお、注釈の語は、重要と思われる語句を取り挙げ、必要に応じて重複して取り挙げることもある¹⁾。

原文

這單于民恨命^[1]問他要錢,上^[2]了比較^[3],一五一十^[4]的打^[5]了幾遭^[6],把丈母^[7]合^[8]媳婦^[9]的首飾^[10]也燒化^[11]了,幾件衣服也典賣^[12]了。丈母還有幾畝地,筭計^[13]賣來送了他,連^[14]女婿^[15]的兩家人口^[16]却^[17]喫甚麼。待^[18]不賣了送去,恐^[19]被他捉住^[20]便打個臭死^[21]。

校注

- [1] 恨命：[副]“狠命；拼命；尽力”しっこく、ひどく。《紅樓》29：話來，便賭氣向頸上抓下通靈寶玉，咬牙～往地下一摔。
- [2] 上：[動]“規定”決める。《醒世》42：追賊贖的一般，叫你討了保，一兩限不完，～了比較，再比較不完，拿了家屬寄監。
- [3] 比較：[名]“官府制定的繳納期限”（お金などを納める）期限。《醒世》90：縣官道：…學生就將美意出示曉諭，停了～。但不可出延於二十日之外，…。
- [4] 一五一十：[成]“五个十个地将数目点清。比喻叙述从头到尾，源源本本，没有遗漏。”一部始終；昔銅錢を数える時五を単位として、一五、一十、十五、二十と数えることから、はっきりと、漏れないことのたとえ。《水滸》25：這婦人聽了這話，也不回言，却趑過來，～，都對王婆和西門慶說了。
- [5] 打：[動]“用板子打，一种刑罚”打つ。《金瓶》19：喝令左右：選大板，拿下去着實～。
- [6] 遭：[量]“次；回”動作の回数を数える。《金瓶》13：西門慶道：弄到有數兒的只一～。
- [7] 丈母：[名]“妻子的母亲”妻の母。《初刻》12：蔣生拜見丈人～，叩頭請罪。
- [8] 合：[介]“和”…と。《金瓶》98：近日～了兩個夥計，在此馬頭上開了個酒店。
- [9] 媳婦：[名]“妻子”妻、女房。《紅樓》10：這麼看來，竟是合該～的病在他手裏除災亦未可知。
- [10] 首飾：[名]“原指头部的饰物，后泛指女子身上佩戴的装饰品”もとは髪飾りを指すが、現在広く女性の装身具を指す。《儒林》40：將他那房裡所有動用的金銀器皿，真珠～，打了一個包袱。
- [11] 燒化：[動]“原意指烧掉，这里为熔化”溶解する。[比較]“銷化”とも作る。なお、“溶化”の用例が検索できず、次例は“烧掉”の意味である。《金瓶》26：我還要撫按上告，進本告狀，誰敢～屍首。
- [12] 典賣：[動]“以财产约定出卖，期满后照原价赎回”質入れする。《紅樓》13：供給之事。如此周流，又無爭競，亦不有～諸弊。
- [13] 算計：[動]“考虑；计划”考える、…するつもりである。《西遊》72：他都～洗了澡要把師父蒸喫。
- [14] 連：[介]“甚至于”…までも。《西遊》21：且莫說要甚麼眼科，～宿處也沒有了。
- [15] 女婿：[名]“女儿的丈夫”娘の夫。《西遊》18：只這一個怪～，也被他磨慌了。
- [16] 人口：[名]“人”人間。《紅樓》13：頭一件是～混雜，遺失東西。
- [17] 却：[副]“然后；再”…してから。《金瓶》16：晚夕李瓶兒除服，～教平安、畫童兩個跟馬，約午後時分，往應伯爵家來。
- [18] 待：[副]“想要；欲待”…しようとする。《金瓶》53：因幾時不在月娘房裡來，又～奉承他。
- [19] 恐：[動]“害怕”心配する、恐れる。《金瓶》67：我待要不來對你說，誠～你早晚暗遭他毒手。
- [20] 捉住：[動]“抓住”捕まえる。《老殘》5：有些江湖上的英雄，也恨這伙強盜做的太毒，所以不到一個月，就～了五六個人。
- [21] 臭死：[連]“半死，形容非常慘烈”（補語に用い）程度が甚しいことを表す。《紅樓》71：奶奶不要生氣，等過了事，我告訴管事的打他個～。

日本語訳

单于民はしつこく金を要求した。日限をきめて、金を出さないと何度も殴りつけた。程法湯は義母と嫁の銀製の髪飾りなども溶解して売り、衣服も質入れた。義母は数畝の土地をもっているが、それも売ってお金を单于民に届けようとした。しかし、そうすると婿の二家族が食べて行けなくなる。けれども、土地を売ってお金を届けないと、捕まえられ死ぬほど打たれることになる。

原文

正在^[1] 苦楚^[2]，恰^[3] 是八月丁祭^[4]，祭^[5] 完了，取過那簿^[6]，查點^[7] 那些秀才^[8]，但^[9] 有不到的懒人^[10]，都是他的納戸^[11]，每人五六錢的鰲^[12] 銀子。程法湯點^[13] 過名去，恭恭敬敬^[14] 的答應^[15] 了。

校注

[1] 正在：[副] “动作恰在进行” …をしている。《二十》3：～那裏納悶，忽聽得一個人提着我的名字叫我。

[2] 苦楚：[名] “痛苦” 苦しみ、辛さ。《三國》76：手下止有五六百人，多半帶傷，城中無糧，甚是～。

[3] 恰：[副] “正巧；刚刚” ちょうど。《金瓶》2：那娘子是丁亥生，屬豬的，交新年～九十三歲了。

[4] 丁祭：[名] “于仲春、仲秋的上旬丁日祭祀孔子” 陰曆二月、八月に行われる祭礼で、孔子を祀る。《儒林》2：先年俺有一個母舅，一口長齋。後來進了學，老師送了～的肥肉來。

[5] 祭：[名] “祭祀” 祭り。《金瓶》88：～畢，然後纔到方丈內他父親靈柩跟前

[6] 簿：[名] “名单” 名簿。《岐路》11：昨日我從南天門上過，譚系紳～上早有名。

[7] 查點：[動] “检查清点数目” 点検する。《西遊》44：只恐他貪頑躲懶，不肯拽車，所以着我兩個去～～。

[8] 秀才：[名] “明清称入县学的生员” 明清時代には県学州学府学の学生を指す＝“生员”。

《金瓶》57：走到吳月娘房內，把那應伯爵荐水～的事體，說了一番。

[9] 但：[副] “但凡” すべて…。《老殘》4：湯裡火裡，我～有法子，必去就是了。

[10] 懒人：[名] “懒惰的人” 怠惰な人。《紅樓》3：這個寶玉不知是怎樣個態～呢。

[11] 納戸：[名] “缴纳金税的人家” 税金を納める家。《明史》79：律令明言，收糧令～平準，石加耗不過五升。

[12] 鰲：[動] ＝慫。“逼迫；敲诈” 強要する。《水滸》61：閉着這個嘴不說話，却是～殺我。

[13] 點（過）名（去）：[動] “按名册点唤” 点呼をとる。《儒林》19：學道出來～，點到童生金躍。

[14] 恭恭敬敬：[形] “恭谦有礼的样子” 態度や言葉使いが丁寧で礼儀正しい。《儒林》32：臧蓼齋辦了一桌齊整菜，～，奉坐請酒，席間說了些閒話。

[15] 答應：[動] “应声回答” 返事をする。《紅樓》11：鳳姐兒立起身來～了一聲，方接過了戲單。

日本語訳

まさに困っている時、ちょうど八月の「丁祭」になった。祭礼が終わると、单于民は名簿を手にとり、秀才たちの点呼を行った。自分のもとへやってこない者からは、すべて税金として取り立てるのである。各人から五六銭の銀子を要求した。程法湯は名を呼ばれて恭しく返事をした。

原文

他叫^[1] 程法湯跪下^[2] 說道：那忘八^[3] 的頭目^[4] 也^[5] 有個色長^[6]，強盜^[7] 的頭目也^[5] 有個大王^[8]，難道^[9] 你這秀才們就便^[10] 沒個頭目。

校注

[1] 叫＝叫：[動] “表示使役，让；使” …に…させる。《水滸》4：具外便請魯提轄上馬，～莊客擔了行李。

[2] 跪下：[動] “跪；跪到地下” 跪く。《西遊》41：六健將上前～。

[3] 忘八：[名] “贱籍的男子，也可做辱骂男性的用语” 牛太郎。《紅樓》80：…便肆行海罵，說：有別的～粉頭樂的，我為什麼不樂。

[4] 頭目：[名] “首领；首脑” かしら、親玉。《水滸》17：小喽囉們盡皆投伏了。仍設小～管領。

[5] 也…也…：[接] “表示并列” …も…も。《金瓶》15：大節間，燈兒～沒點，飯兒～沒上，就要家去。

[6] 色長：[名] “娼妓业的头目” 遊郭の頭かしら。《醒世》26：…後邊跟了許多舉人相公，叫是迎賀～。

[7] 強盜：[名] “抢劫的盜匪” 強盜、盜賊。《金瓶》47：又告到提刑院，夏提刑見是～劫殺人命等事，把狀批行了。

[8] 大王：[名] “对強盜首领的称呼” 盜賊の首領。《水滸》5：近來山上有兩個～扎了寨柵，聚集着五七百人，打家劫舍。

[9] 難道：[副] “表示反问或推测语气” まさか。《紅樓》6：…便急道：你老只會炕頭兒上混說，～叫我打劫偷去不成。

[10] 就便：[副] “就，表示强调” [比較] 逆序語“便就”が別にある。“便就”の意味はある条件によって生み出される結果を表す。「すると」くらいの意味である。《水滸》180：說道：婁丞相見李俊說了這一席話，～准信。

日本語訳

单于民は程法湯に跪かせて言った。「遊郭の牛太郎にも色長という頭（かし）がいる。強盜にも大王という頭（かし）がいる。まさか秀才であるお前達に頭（かし）がないわけではないわけではあるまいな。

原文

看^[1] 山的^[2] 也就^[3] 要^[4] 燒那山裏的柴，管^[5] 河的也就要吃那河裏的水，都^[6] 像^[7] 你這個畜生^[8] 進^[9] 了一場^[10] 學^[9]，只^[11] 送得^[12] 我兩數^[13] 銀子，就要拱手^[14]。我沒的^[15] 是來管^[16] 忘八樂工^[17] 哩。

校注

- [1] 看：[動] “看守；守护” 見守る。《金瓶》59：王經道：俺姐夫～着卸行李，還等着見俺爹纔來哩。
- [2] 的：[助] “用在动词或动词词组后使其名词化” …の；人。《水滸》2：只恐門前兩個牌軍，是殿帥府撥來伏侍你～。
- [3] 就：[副] “表示肯定强调” 強調を表す。《紅樓》7：周瑞家的因問他道：…為他打人命官司的那個小丫頭子麼。金釧道：可不～是他。
- [4] 要：[動] “愿望；想要” …したい。[比較] 中国では古より本業の現場での「役得（＝利益）」を望む。故に文脈から「願望」を指す。《金瓶》2：王婆道：若～買他燒餅，少間等他街上回來買，何消上門上戶。
- [5] 管：[動] “看管” 管理する。《水滸》6：智深道：洒家不～菜園，俺只要做都寺、監寺。
- [6] 都：[副] “全部” 全員、みんな。《金瓶》95：…大姪子、二姪子、三箇女僧，～家去了。
- [7] 像：[介] “和某人类同” …のようだ。《金瓶》26：滿天下人都～你這奴才，也不敢使人了。
- [8] 畜生：[名] “詈言，辱罵他人之話” 馬鹿者、畜生。《水滸》3：史進大喝道：～，却怎生好。
- [9] 進學：[動] “离合动词，进入官学学习” 進学する。《紅樓》2：…名喚賈珠，十四歲～，…
- [10] 場＝場：[量] “回；次” 回。《金瓶》6：…被吳月娘告了一狀，打了一～官司出來。
- [11] 只：[副] “仅仅” 只、のみ。《水滸》2：於内～欠一名八十萬禁軍教頭王進。
- [12] 得：[助] “同助词了，表示动作或状态的实现” …た。《金瓶》48：…已知禮物交～明白，蔡狀元見朝，…。
- [13] 數：[名] “表示余数，…多” 余り。《水滸》9：兩邊眾人被打傷了十～箇。
- [14] 拱手：[動] “两手合在胸前的一种表示敬意的姿勢” お辞儀する。《紅樓》40：士隱聽了，便～而別。[比較] “只＋V＋就要＋拱手” …するだけで後は知らんふりする。
- [15] 沒的：[副] “莫非；难道” まさか。《金瓶》72：…我～請他去。
- [16] 管：[動] “監管；管理” 監督する。《水滸》13：那步兵都頭，～着二十箇使鎗的頭目，二十箇土兵。
- [17] 樂工：[名] “乐师，以乐舞为职业的人” 楽師。《金瓶》45：不一時，把六名～叫至當面跪下。

日本語訳

山守りは、山の中の薪でご飯を炊く。川守りは、川の水で喉を潤す。お前たち畜生どもは、学校に入学して一二両くらいの銀子を届けただけで、俺の前でお辞儀して後は知らんふりをするのだな。俺はそんな卑しいバカ楽師などを監督しに来たのではないぞ！」

原文

抬過凳來^[1]，叫門子^[2]着實^[3]的打了二十五板^[4]。打的^[5]程法湯上天無路，下地無門，一條^[6]單褲^[7]打得稀爛^[8]，兩隻^[9]腿打得丁黑^[10]了一塊，心裏氣惱^[11]。

校注

[1] V過…來：[連]“动词补语，其中来作为复合的趋向补语，经常会发生宾语插在两词之间的现象”…てきた。《水滸》8：林冲當下看人寫了，借～筆～，去年月下押個花字，打個手模。

[2] 門子：[名]“从事各种事务的差役”下級役人。《儒林》5：知縣大驚，細細在衙門裏追問，纔曉得是～透風。

[3] 着實：[副]“使劲；极力”力を入れて、極力。《金瓶》19：喝令左右：選大板，拿下去～打。

[4] 板：[量]“表示古代杖刑的数量的量词”回。《水滸》103：須臾，打了二十～，打得武二口口聲聲叫冤，…。

[5] 的＝得：[助]“表示动作的结果或程度”。《金瓶》8：擎馬鞭子下手打了二三十下，打～妮子殺猪也似叫。

[6] 條：[量]“表示下装的量词”枚。《金瓶》12：…孫寡嘴腰間解下一～白布男裙，當兩壺半盞酒…。

[7] 單褲：[名]“单层的裤子”一重の下着。《醒世》79：小珍珠依舊還是兩件布衫，一條～，害冷躲在廚房。

[8] 稀爛：[動]“破烂不堪”ぼろぼろ、ずたずた。《儒林》10：…乒乓一聲，把兩盤點心打的～。

[9] 隻：[量]“形容腿的量词，现代汉语多用条”本。《水滸》38：…把兩箇甲馬拴在兩～腿上，作起神行法來…。

[10] 丁黑：[名]“红肿发黑”腫れてどす黒くなる。

[11] 氣惱：[動]“生气；恼怒”怒る。《儒林》40：…又不是你不肖花消掉了，何必～。

日本語訳

腰掛を運んでこさせ、これで下働きの男にこっぴどく25発叩かせた。程法湯は天に逃れる道無く地に入る門無しで、何処にも逃げられなく、結局、一重（ひとえ）の下着が打たれてずたずたになり、二本の足も腫れてどす黒くなった。ただ、程法湯は、心の中で怒っているだけである。

原文

進學^[1]原是圖榮^[2]，如今^[3]打^[4]丈母娘婦的首飾衣裳^[5]損折^[6]得精光^[7]，還打發^[8]得不歡喜^[9]，被他痛打^[10]這一頓^[11]。如今棒瘡^[12]又大發^[13]疼痛^[14]，着了惱^[15]，變^[16]了傷寒^[17]，不上^[18]四五日之間，死^[19]了。

校注

- [1] 進學：[動] “科举时代, 童生录取入府县学成为秀才” 明清時代「秀才」に合格する事を指す。《醒世》37：只是你兩個這一番出考，我們都要指望你～。
- [2] 圖榮：[連] “贪图名誉” 名誉・榮達を図る。《殊域》17：然英聞仁者不中道而改節，義者不苟生以～，勇者不見幾而不作。
- [3] 如今：[副] “现在” 今、現在。《紅樓》50：～罰你去取一枝來。
- [4] 打：[動] “制作（金银首饰）”（金銀製のアクセサリーや装飾品などを）作る。《醒世》1：另收拾了一处房子，做衣裳，～首饰，拨家人。
- [5] 衣裳：[名] “衣服” 衣服。《水滸》13：解了鎗刀弓箭，卸了頭盔衣甲，換了～。
- [6] 損折：[動] “贱卖；抵换” 安値で錢に換える。《醒世》3：誰家的好老婆～了衣裳首飾換嘴吃。
- [7] 精光：[形] “一无所有” すっかりなくなる。《儒林》34：不到十年内，把六七萬銀子弄的～。
- [8] 打發：[動] “招致” …させる。《醒世》18：他舅的話也不可全信，只怕在他店裏住，～的不喜歡，惱他也不可。
- [9] 歡喜：[形] “高兴” 楽しい。《紅樓》97：因此見了雪雁竟如見了黛玉的一般～。
- [10] 痛打：[動] “狠狠的殴打” ひどく殴る。《金瓶》47：見不由分說，將苗青～一頓，誓欲逐之。
- [11] 頓：[量] “回数（用于动作）”（食事・叱責・罵倒などの）動作の回数を表す。《金瓶》1：當下這隻猛虎，被武松沒頓飯之間，一～拳腳，打的動不得了。
- [12] 棒瘡：[名] “被棍棒打后皮肤或黏膜发生溃烂的疾病” 棒で殴られて皮膚や粘膜が爛れる疾患。《醒世》89：我本待枷你一月，待你～漸好，再打三十板放你。
- [13] 大發：[動] “超过了适当的限度” 限度を越す。度を過ぐす。《醒世》18：太太的人參、琥珀藥也沒得喫了，病也不～了，只是在家坐哭泣咒。
- [14] 疼痛：[形] “痛” 痛い。《紅樓》47：待要掙挫起來，無奈遍身～難禁。
- [15] 着（了）惱：[動] “生气” 怒る。《警世》24：我去西廳時，只怕大娘～。
- [16] 變：[動] “变成” 変わる。《清朝》32：起初是瘡疾，現在～了傷寒，這幾天病勢很是利害。
- [17] 傷寒：[名] “由伤寒杆菌引起的急性传染疾病” 発熱や悪寒、頭痛や肩こりを伴う病氣。《紅樓》51：近日時氣不好，竟算是個小～。
- [18] 不上：[動] “不到” 至らない。《京本》15：～半年，連起了幾主大財。
- [19] 死：[動] “去世” 亡くなる。《紅樓》79：況且小姐丫鬟亦不典雅，等我的紫鵲～了，我再如此說，還不算遲。

日本語訳

県城の学校に入ったのは、もともと榮達を目論んでの事。ところが、今では、義母や嫁の装身具、衣装をたたき売りにしたのに、相手の單于民の不興を買い、しこたまぶたれる羽目となってしまった。程法湯は、棒で打たれた傷がひどく痛み、加えて腹立ちのあまり、傷寒という病氣に変わって、四五日足らずで死んでしまった。

原文

有一個孫鄉宦^[1]做^[2]了兵部^[3]主事^[3]，因景皇帝要廢^[4]英宗太子^[5]，諫言^[6]得罪^[7]回來，在家閑住^[8]，聞得^[9]說有這一件事有，心中大不平^[10]起來了。自己來與程法湯吊孝^[11]，必定^[12]驗看^[13]了程法湯的臀^[14]。

校注

[1] 鄉宦：[名]“解职后居住乡里的官宦”（昔、）退官し村里に定住した人。《警世》25：支家的書不知是真是假，當初在姑蘇時不見有甚麼支～扶持了我，如今却來通書。

[2] 做：[動]“担任”（身分や職務が）…になる。《水滸》2：此之仇，他今日發跡，得～殿帥府太尉，正待要報仇。

[3] 兵部：[名]“古代官署名。六部之一”中央官署の名。旧官製六部の一つ。《紅樓》79：年紀未滿三十，且又家資饒富，現在～候缺題陞。

[4] 廢：[動]“停止；不再使用”不要とする、不要として除く。《金瓶》1：帝曰：不難。吾明日出朝，～太子而立爾子，意下如何。

[5] 太子：[名]“皇太子”王や皇帝の息子で王位または皇位の継承者。《水滸》114：～天定大喜。

[6] 諫言：[名]“规劝的话”目上の人のお失などを指摘して忠告すること。諫言。《封神》35：造砲烙，不容～。

[7] 得罪：[動]“冒犯；触怒”人の気持ちを害する。《紅樓》93：我並沒～人，為什麼這麼坑我～。

[8] 閑住：[動]“无业而无所事事”職がなくぶらぶらしたままにいる。《醒世》35：後來中了進士，仍舊被他所累，一個小小的行人，與了個不謹～。

[9] 聞得：[動]“听闻；听说”聞きつける、…らしい。《西遊》73：方纔小童進來取茶，我～他說，是四個和尚。

[10] 大不平：[連]“由不公平的事引起心中非常愤慨、不满”ひどく不平を感じる。非常に不満に思う。《聊齋》9：女問得故，～。

[11] 吊孝：[動]“犹吊丧”お悔やみに行く。《隋唐》5：待我回籍時，還差官到潞州，登堂～。

[12] 必定：[副]“表示意志的坚决”必ず…する。《醒世》98：那莊戶的女兒立心等候，～要嫁一個進士終罷。

[13] 驗看：[動]“驗 = 验。查看；检验”觀察する、検査する。《醒世》96：都送奶奶面前，當面叫奶奶～明白，分送了二人，即時打發了他出去。

[14] 臀：[名]“屁股”お尻。《醒世》32：說着夠多大一會，自己撞這二十五板子在～上。

日本語訳

孫郷宦という一人の男がいて、兵部主事の官職を得ていた。景皇帝が英宗太子を廃そうとしたとき、諫言して景帝の怒りに触れたため、ここの故郷に戻り閑居していた。ところが、程法湯急死の事件があったことを聞くに及び、大いに不満に思い、自ら程法湯を弔問し、必ずや程法湯の打たれた尻を検

分しないと気が済まないでいた。

原文

一隻腿打得焮青^[1]，一隻腿割^[2]得稀爛^[3]，看了大哭^[4]一場，隨^[5]與單于民抵死^[6]做起對^[7]來，自己走到省^[8]下，兩院^[9]司道^[10]都通^[11]了呈子^[12]。

校注

[1] 焮青：[形]“青黑色”青黒い。《醒世》49：却原來是個女子，方有兩個月，～的頭皮，瑩白的臉，通紅的唇。

[2] 割：[動]“切割”割る、切る。《水滸》31：吃了三四鍾，便去死屍身上～下一片衣襟來…。

[3] 稀爛：[形]“破破烂烂”ほろほろ、ひどく傷んでいるさま。《金瓶》13：你若奪一奪兒，賭個手段，我就把他扯得～，大家看不成。

[4] 大哭：[連]“大声的哭泣”大声で泣く。《水滸》26：武松放聲～，哭得那一家鄰舍，無不恟惶。

[5] 隨：[副]“随后”すぐに、（その）後。《金瓶》14：潘金蓮～跟着他娘，往房裡去了。

[6] 抵死：[動]“竭尽全力”精いっぱいやる。全力を尽くす。《平妖》7：算定這女眷定肯開手的，如何放過，～纏住，要他發心善捨。

[7] 做（起）對：[動]“对抗；斗争”争う。《醒世》35：程樂宇作難，教官煞實～起～來。

[8] 省：[名]“官署”役所。《紅樓》4：他意欲捲了兩家的銀子，再逃往他～。

[9] 兩院：[名]“撫院和按院”二つの行政機関。《水滸》44：因此就參他做～押獄，兼充市曹行刑劊子。

[10] 司道：[名]“布政司和道台”二つの官職。《儒林》56：禮部行文到各省，各省撫按行～，～行到各府州縣。

[11] 通：[動]“递交”提出する、渡す。《金瓶》14：自這說話，逼迫的李瓶兒就把房門鑰匙～與馮媽媽。

[12] 呈子：[名]“向官方呈上的公文”訴狀、上申書。《水滸》9：東家惱了，一張～送在德清縣裏。

日本語訳

片方の足が殴られて青黒くなり、もう一本の足が割られてその肉がほろほろになっていた。孫鄉宦は、それを見るや大声で泣き、命を懸けて單于民と戦うことを誓った。自ら省城の役所に赴き、布政、按察の兩院の役所にも訴えの上申書を出した。

原文

兩院行^[1]了學道^[2]，後來把這單于民照^[3]貪酷^[4]例問^[5]了河間衛的軍，追^[6]了七百銀子的贓^[7]，零碎^[8]也打夠^[9]二百多板子。把那行杖^[10]的兩個鬥^[11]都問了衙驛^[12]的徒。這單于民雖不曾抖^[13]得他個精光^[14]，却也算得一敗塗地^[15]的回家。

校注

- [1] 行：[動] “下达指示或命令的文书等” 命令を下す。《金瓶》51：有吳大舅前來對西門慶說：有東平府～下文書來，派俺本衛兩所掌印千戶管工脩理社倉，…。
- [2] 學道：[名] “学政；学台” 省の科挙を管理する官職。《儒林》16：考了出來，恰好知縣上轅門見～，在學道前下了一跪。
- [3] 照：[動] “按照” …によって。《平妖》13：若只～着符形描畫，自已的神氣先自散亂，如何感動得神鬼。
- [4] 貪酷：[名] “贪官酷吏” 貪婪で残酷な官吏。《水滸》58：便叫王義見魯智深、武松，訴說賀太守～害民，強占良家女子。
- [5] 問：[動] “问罪” 罪を問う。《水滸》32：你們若不去奪得恭人回來時，我都把你們下在牢裏～罪。
- [6] 追：[動] “收回” 取り返す。《金瓶》67：一連他家兒子孫文相都開出來，只～了十兩燒埋錢，問了個不應罪名。
- [7] 贓：[名] “贪污收受所得财产” 職務に関して受け取る不正な報酬。《金瓶》47：下手之時，還有他家人苗青同謀，殺其家主，分～而去。
- [8] 零碎：[形] “零散；细碎” 細々している。《儒林》23：若是司上有些～事情，打發一個家人去打聽料理。
- [9] 夠：[動] “数量上达到” (必要な数量に) 達する、足りる。《醒世》70：每年老公也使着二百兩的銀子，小的送的禮，那一遭不～好幾兩銀子。
- [10] 行杖：[動] “用杖责打” 杖で行刑する。《平妖》33：才打一下去，左黠全然不覺，倒是～的叫痛，恰似打在自家身上一般。
- [11] 門斗：[名] “衙役” 役所中での使い走り。《儒林》17：匡大東西纔拾完在擔子裏，挑起擔子，領兩個～來家。
- [12] 驛：[名] “驿站” 昔の宿場。《西遊》30：此時～裏無人，止有白馬在槽上喫草喫料。
- [13] 抖：[動] “揭穿” 曝け出す、暴露する。
- [14] 精光：[形] “净尽；一无所有” すっかりなくなる。《儒林》34：不到十年内，把六七萬銀子弄的～。
- [15] 一敗塗地：[成] “失败到不可收拾的地步” 再び立つことできないほど大敗する。《紅樓》105：完了，完了，不料我們～如此。

日本語訳

布政、按察の両院は学道へ命令を下した。その後、单于民が貪婪で残酷な官吏であるという罪に問われ、河間衛軍に兵役として流された。それに、贓銀七百両を追徴させられた。そして、全部で二百回以上の杖刑を受けた。先に程法湯を打った二人の使い走り役人は、衙驛へ徒刑として流された。单于民は身ぐるみ剥がれる無一文までにはならなかったが、一敗地に塗れて故郷に帰って来たのである。

原文

這單豹是單于民的個獨子^[1]，少年^[2]時人物生得^[3]極是^[4]標致^[5]。身材^[6]不甚^[7]長大^[8]，白面^[9]長鬚^[10]，大有^[11]一段仙氣^[12]。十八歲進了學^[13]，補過廩^[14]，每次都考在優等^[15]。

校注

[1] 獨子：[名]“独生子”一人っ子。《兒女》30：安老夫妻幕年守着个獨子，未免舐犢情深，加了几分憐愛。

[2] 少年：[名]“年少；年轻”少年。若い。《儒林》39：郭孝子武藝精能，～與我齊名，可惜而今和我都老了。

[3] 生得：[動]“长得”生まれつき。《水滸》21：那厮喚做小張三，～眉清目秀，齒白唇紅。

[4] 極是：[副]“非常；十分”とても、非常に。《紅樓》9：誰知賈茵年紀雖小，志氣最大，～淘氣不怕人的。

[5] 標致：[形]“标致；美”整っている。美しい。《西遊》23：那女子排立廳中，朝上禮拜。果然也生得～。

[6] 身材：[名]“身材；身高”体つき。《金瓶》7：這娘子今年不上二十五六歲，生的長挑～，一表人物。

[7] 不甚：[副]“不怎么”あまり…でない。《水滸》34：當夜雖有月光，亦被陰雲籠罩，～明朗。

[8] 長大：[動]“长大，长高”大きくなる。《西遊》17：個個頭圓頂天，足方履地，但比老孫肥胖～些兒，非妖精也。

[9] 白面：[名]“白净的脸庞”若くて知識も経験もないこと。ここは白くてきれいな顔。《水滸》66：你又露出雪也似～來，亦不像忍飢受餓的人。

[10] 長鬚：[名]“长长的胡须”長い髭。《醒世》11：說那神道有二尺～，左額角有一塊黑痣。

[11] 大有：[動]“有很多；非常多”大いに…がある、たくさんある。《紅樓》14：寶玉聽如此說，想一想～情理，也就不生別論了。

[12] 仙氣：[名]“仙人的感觉”仙人の感じ。

[13] 進（了）學：[動]“明清科举制中，童生考取生员，进入府、县学肄业”明清科举制で、童生が歳試・科試に合格して県学に入ることを言う。俗に“中了秀才”。《醒世》39：只為他從生員讀書十年，教他～，連拜也不拜生員一拜。

[14] 補（過）廩：[動]“明清科举制中，生员经岁、科两试成绩优秀者，增生可依次升为廩生”明清科举制で、童生が歳試・科試に合格し、成績が優秀な人は廩生になる。《儒林》36：看見門生這個名字，就要取做一等第一，～。

[15] 優等：[名]“优秀；优等”優等、上等。《聊齋》6：入场，适遇此題，录之，得～，食饒焉。

日本語訳

單豹は單于民の一人息子で、若い時は大変な美男子であった。背はあまり高くなかったが、白い顔に長い髭をはやし、さながら仙人の如き雰囲気があった。十八歳で県学に入り、廩膳生に補され、毎

回の歳考という勤勉審査の試験にはいつも優等とされた。

原文

在外與人相處^[1]，真是^[2]言不妄發^[3]，身不妄動^[4]。也吃得幾杯酒，却從不曉得^[5]撒^[6]甚麼酒風^[7]。那花柳門^[8]中，任你甚麼三朋四友^[9]，哄^[10]他不去。在家且是^[11]孝順，要一點忤逆^[12]的氣兒^[13]也是沒有的。

校注

[1] 相處：[動]“相处；交往”付き合う、交際する。《金瓶》41：我說自這席間坐次上，也不好～的。

[2] 真是：[副]“确实是；的确”本当に。《西遊》12：～個活羅漢下降，活菩薩臨凡。

[3] 妄發：[動]“轻率地发言”軽率に言う、考えもなく言う。《鏡花》18：若论优劣，以上各家，莫非先儒注疏，婢子見聞既寡，何敢以井蛙之見，～議論。

[4] 妄動：[動]“轻率地发言”軽率に行動する、考えもなく振る舞う。《兒女》5：你分明是誤認了我的來意，～了一个疑团，不知把我认作一个何等人。[比較]“言不妄發，身不妄動”の8文字で考えるべき。

[5] 曉得：[動]“知道；懂得”知っている、分かっている。《儒林》9：我們是婁三老爺裝租米的船，誰人不～。

[6] 撒：[動]“发”勝手気ままに行動する。《醒世》93：故裝作法，披了頭，赤了脚，～上一陣酒風。

[7] 酒風：[名]“酒瘋”酒乱。《金瓶》24：又不見了些東西，坐在當街上，撒～罵人。

[8] 花柳門：[名]“花柳巷；红灯区”花柳の巷、紅灯の巷。《儒林》53：那些姊妹們都勻脂抹粉，站在前門～之下，彼此邀伴頑耍。

[9] 三朋四友：[名]“泛指朋友”「友だち」を指す。《恒言》5：自有一班無賴子弟，～，和他們擎鷹放鶴，駕犬馳馬，射獵打生為樂。

[10] 哄：[動]“哄骗”だます。《水滸》43：我又不是此間人，沒來由～你做甚麼。

[11] 且是：[副]“真是；确实”とても、本当に。《金瓶》23：金蓮道：三娘剛才誇你倒好手段兒。燒的這豬頭倒～稀爛。

[12] 忤逆：[動]“忤逆；叛逆”（親）不孝をする、（親）に背く。《水滸》22：不孝之子宋江，自小～，不肯本分生理，要去做吏。

[13] 氣兒：[名]“脾气；习性”気性。《醒世》23：若拿出甚麼村酒家常飯來，便放在石上，大家就吃，那裏有一點兒鄉宦的～。

日本語訳

単豹は、外で人と付き合う時、実に妄言を發せず、妄動もせず、であつた。数杯の酒は飲めたが、それでも酔つてくだを巻くことはなかつた。友だちはどんなに花柳街へ彼を賺（ず）し誘つても、彼は行かなかつた。家ではとても親孝行で、反抗的なところは少しもなかつた。

原文

自從^[1]單于民做了教官^[2]，單豹長^[3]了三十多歲，漸漸^[4]的把氣質^[5]改變^[6]壞了，也還像^[7]個人。自從打殺^[8]了程法湯，這單豹越發^[9]病狂起來，先把自己的媳婦今日一頓^[10]，明日一頓，不（＝上）兩個月，弔死^[11]了。

校注

[1] 自從 [介]：“表示时间的起点”。…より、…から。過去のある時点を起点とする。《兒女》14：華忠回道：奴才～送了大爺起身，原想十天八天就好了，不想躺了將近一個月才起炕。

[2] 教官 [名]：“教官；师老” 教化を担当する役人。《儒林》15：到後來，做任～，也替父母請一道封話。

[3] 長 [動]：“生长” 成長する。《二刻》23：過了兩三年，王公幼女越～成了，王公思念亡女，要與行修續親，屢次着人來說。

[4] 漸漸 [副]：“逐渐” だんだんと、次第に。《金瓶》54：說未畢，窗縫里隱隱望見小玉手拿一幅白絹，～走近屋裡來，又忽地轉去了。

[5] 氣質 [名]：“脾气” 気性。《初刻》7：那裴晤到得中條山中，看見張果齒落髮白，一個掐搜老叟，有些嫌他，未免～傲慢。

[6] 改變 [動]：“变化、事物产生显著的差别” 変わる、変化する。《金瓶》54：今日爹沒了，就～了心腸，把我來不理，都亂來擠撮我。

[7] 像 [動]：“相似、类似” 似る、似ている。《二刻》7：這個官人年少風流，模樣俊俏，雖然是個官人，還～個子弟一般。

[8] 打殺 [動]：“打死” 打ち殺す。《水滸》23：兩個獵戶把武松～大蟲的事，說向眾人。

[9] 越發 [副]：“更加” ますます、いっそう、いよいよ。《金瓶》10：知縣聽了此言，～惱了，道：你這廝親手打死了人，尚還口強，抵賴那個。

[10] (一) 頓 [量]：“量词，回数（用于动作）” 食事や小言など回数を表す、回。《二刻》20：只苦的是陳定，一同妾丁氏俱拿到官，不由分說，先是一～狠打，發下監中。

[11] 弔死 [動]：“上吊死，吊杀” 縊死する、首をくくって死ぬ。《初刻》34：平日與他往來的人家內眷，聞得此僧事敗，～了好幾個。

日本語訳

單于民が教官となった時、單豹の方は三十歳を超えていた。この頃よりだんだんと性格が悪く変わっていった。それでもまだ人間らしさが残っていた。ところが、父親の單于民が程法湯を打ち殺したあたりから、單豹はますます気でも狂ったか、まず自分の妻を今日も明日もと、毎日のように殴り、二か月もしないうちに、首を吊って死なせてしまった。

原文

見了單于民的踪影^[1]，便瞪^[2]起一雙眼來，小喝大罵^[3]，還捏^[4]起拳^[5]來要打；也不曉得^[6]

呼喚^[7] 甚麼爹娘^[8]，叫單于民是老牛，叫單于民的婆子^[9]是老狗，自己稱呼是我程老爺。

校注

[1] 踪影 [名]: “足迹和身影。指寻找的对象” あとかた。《紅樓》1: 待他小解完了來抱時，那有英蓮的～。

[2] 瞪 [動]: “怒目直视” じろっと見る、にらみつける。《紅樓》29: 賈珍還～着他，那小廝便問賈蓉: 爺還不怕熱，哥兒怎麼先涼快去了。

[3] 小喝大罵 [熟]: “高声斥骂” 大きい声で叱り罵る。

[4] 捏 [動]: “握” 握りしめる。《初刻》7: 二人各取棋子一把，～着拳頭，問道: 此有何物。

[5] 拳 [名]: “拳头” こぶし、げんこつ。《兒女》6: 只見那瘦子緊了緊腰，轉向南邊，向着那女子吐了個門戶，把左手攏住右～，往上一拱，說了聲: 請。

[6] 曉得 [動]: “明白; 知道” 理解する、知る。《兒女》8: 你我在悅來店怎的個遇見，怎的個情由，他三位無從～，也與他三位無干，此時不必饒舌。

[7] 呼喚 [動]: “呼叫; 喊叫” 叫ぶ。《紅樓》23: 賈璉正同鳳姐吃飯，一聞～，放下飯便走。

[8] 爹娘 [名]: “父母” 父母、両親。《金瓶》45: 李姐與西門慶磕了四個頭，就道: 打攪～這裡。

[9] 婆子 [名]: “妻子” ばばあ。女性を輕蔑するという。[比較] ここでは、“婆子” の意味は妻であるが、話者の母を指す。《初刻》37: 那～喜聽的是這些說話，便問道: 官人見的是甚麼光景。

日本語訳

父親である單于民の姿を見ると、両目を怒らせ、大声で罵って、こぶしを握り締め打とうとする。もはやお父さん、お母さんと呼ぼうともせず、單于民を「ぼけ牛」、單于民の女房を「ぼけ犬」と呼び、自分のことを「われ程閣下」と呼んだ。

原文

後來不止把^[1] 氣質^[2] 变了，就是把那模樣^[3] 聲音变得一些也不似^[4] 那舊日^[5] 的光景^[6]。一隻左眼吊^[7] 了上去，一個鼻子却^[8] 又歪過右邊，臉上的肉都橫生^[9] 了，一部^[10] 長鬚都卷得像西番回子^[12] 一般。間或^[13] 日把眼睛也不上吊，鼻子也不歪邪^[14]。

校注

[1] 把: [介] “表示使役，让; 使” …させる。《金瓶》1: 奔過樹林子，見一塊光撻撻地大青臥牛石，～那棒倚在一邊。

[2] 氣質: [名] “性格” 性格。《紅樓》79: 況且見薛蟠～剛硬，舉止驕奢。

[3] 模樣: [名] “人的长相” 顔かたち。《金瓶》63: 李大姐這影倒像似好時那等～，打扮的鮮鮮兒，只是嘴唇略匾了些兒。

- [4] 似：[動] “像”（…の）ようである。《金瓶》3：怎的是挨光。～如今俗呼偷情就是了。
- [5] 舊日：[名] “往日” 昔の時。《紅樓》2：太爺姓賈名化，本貫胡州人氏，曾與女婿～相交。
- [6] 光景：[名] “情景” 光景。《紅樓》2：見他這般～便道：你為什麼又不看了。
- [7] 弔：[動] “垂直向上抬起” 吊り上がる。《金瓶》100：或有無頭跛足者，或有無頭跛足者，或有～頸枷鎖者，都來悟領禪師經咒，列於兩旁。
- [8] 却：[副] “表示转折” かえって。《紅樓》86：紫鵲在旁看見這般光景，～想不出原故來。
- [9] 橫生：[名] “脸上肉多，有橫向紋路，多指凶相” 凶惡に見える肉の顔つき。《七俠》8：正說之間，只見走出一個濃眉大眼、膀闊腰粗、怪肉～的道士來，說道…。
- [10] 一部：[量] “表数量，一把” 相當な数量。《儿女》15：額下～銀須，連鬢過腹，足有二尺來長，被風吹得飄飄然，掩着半身。
- [11] 西番＝西藩：[名] “古時指青海省南部一帶，現指西藏自治区和四川省” 昔、青海省南部を指し、現在のチベット自治区と四川省である。《醒世》6：已是世間希奇古怪的，如何會念經。但那～原來的人今在何處。
- [12] 回子：[名] [貶] “回族” 回教徒。《儒林》5：次日早晨，大搖大擺的出堂，將～發落了。
- [13] 間或：[副] “偶尔” 偶に。《醒世》28：～陰天下雨，真君偶然不出化齋。
- [14] 歪邪：[名] “不正” 歪む。《水滸》92：飛土揚塵，從西過東，把旗幟都搖撼的～。

日本語訳

やがて、性格が変わってしまったばかりではなく、顔や声までも昔とはすっかり変わってしまった。左の目は吊り上がり、鼻は右に曲がり歪み、顔には肉が変につき、長い髭は巻いて西域の回教徒のようになった。ところが、たまたま、目も吊り上がらず、鼻も曲がらず歪まない日もあったのである。

原文

見了爹娘，宛若^[1]就如平日馴順^[2]，問他向日^[3]所爲^[4]的事，他再也不信，說是旁人哄^[5]他。正好好的，三不知^[6]又變壞了。進去^[7]歲考^[8]，他却不做^[9]文章，把通^[10]卷子密密^[11]寫的都是程法湯訴冤說苦^[12]的情節^[13]，敘得甚^[14]是詳細。

校注

- [1] 宛若：[動] “仿佛” まるで…のようだ。《隋唐》27：月光照入，～水天相接，遂名为广明湖。
- [2] 馴順：[形] “性情柔和能服从” おとなしく従順である。《醒世》59：薛如兼也甚～，盡那半子的職分。
- [3] 向日：[名] “过去” 昔。《西遊》22：師兄，你去時，千萬與我上覆一聲：～多承指教。
- [4] 所爲：[名] “所做” …すること。《官場》52：這些少大人雖然明知道他的～，因為念他平日人還恭順，亦就不肯在老頭子跟前揭穿他的底子。
- [5] 哄：[動] “欺騙” 欺く。《西遊》15：你怎麼送他一頂花帽，～我戴在頭上受苦。
- [6] 三不知：[副] “突然” 突然に。《金瓶》44：養在家裡，也問我聲兒，～就出去了。

- [7] 進去：[動] “从外面到里面去” 中へ入っていく。《紅樓》67：旺兒先～，回說：興兒來了。
- [8] 歲考：[名] “古代对县学学生的考核” 學生を等級別に分ける試験。《儒林》19：他便收拾行裝，去應～。
- [9] 做：[動] “写文” 書く。《水滸》10：古時有個書生，～了一個詞，單題那貧苦的恨雪。
- [10] 通：[形] “全部” 全て。《紅樓》69：胡君榮一見，魂魄如飛上九天，～身麻木，一無所知。
- [11] 密密：[副] “事物之间距离近” ぎっしり。《水滸》74：任原的徒弟，都在獻臺邊，一週遭都～地立着。
- [12] 訴冤說苦：[動] “诉说冤屈” 不公平を訴える。
- [13] 情節：[名] “事情的经过” 事柄の経緯。《儒林》43：次日，將出兵得勝的～報了上去。
- [14] 甚：[副] “很；极” 非常に。《紅樓》120：提起村居養靜，～合我意。只是我受恩深重，尚未酬報耳。

日本語訳

親に会っても、昔のように従順である。以前自分のした異様なことを尋ねると、単豹は全く信じなく、自分をからかっていると言う。ところが、普通にしているかと思うと、急に悪く変わったりする。歳考に赴いても、彼は模範解答の文章を作らず、その代わりに程法湯の無実殺害の苦しみを訴え、ぎっしり答案に詳しく述べ立てた。

原文

學道喜歡^[1] 他做得好，就高高的取^[2] 了一個六等^[3] 第一，還行在縣裏查究^[4]。縣裏回^[5] 說：他是心病。那宗師說：這不是心病，這還是有甚麼冤業^[6] 報應^[7]。自從^[8] 縣詳^[9] 上去，宗師也就罷了^[10]。

校注

- [1] 喜歡：[形] “喜爱；愉快；高兴” 好き。《西遊》17：行者道：你且休～暢快，我還未曾到手…。
- [2] 取：[動] “选取” 選抜する、決める。《儒林》16：覆試過兩次，出了長案，竟～了第一名案首。
- [3] 六等：[名] “六个等级” 六つの等級。《儒林》7：後大聲道：四川如蘇軾的文章，是該考～的了。這位老先生記在心裏，到後典了…。
- [4] 查究：[動] “调查追究” 追究する。《醒世》71：南城察院，一面急急的上了本。旨意下部查究，堂上復了本，議將宋主事降三級，調外…。
- [5] 回：[動] “答复，答报” 回答する。《水滸》9：洒家來。提了禪杖先走。兩個公人那里敢～話，只叫：林教頭救俺兩個。依前背上…。
- [6] 冤業：[名] “[佛教用語]。可写作‘冤孽’，或单言‘冤’，单言‘业’，等于说‘罪过’”。恨みと罪業。《醒世》28：親也還未成，怎就吊死。這必定是宿世的～，這沒帳的官司，就告狀也告不出甚麼來…。
- [7] 報應：[名] “[佛教用語]。指有施必有报，有感必有应，故现在之所得，无论祸福，皆为报应。”（悪行の）報い。《醒世》57：晁思才若是有些知識的人，看了這等的～，豈不該把這沒天理的心腸快忙改過，把…。

[8] 自從:[介] “介词,表示过去的某段时间的起点”(過去のある時点を起点として) …から。《水滸》17:該管麼。何濤答道:稟覆相公,何濤～領了這件公事,晝夜無眠,差下本管…。

[9] 詳:[動] “提交”提出する。《岐路》1:張請終養申詳,我添上一張駁稿備案。你再～一套委無別故欺飾,申詳到司,司里再加上…。

[10] 罷了:[動] “语气词,用在陈述句的末尾,有‘仅此而已’的意味,对句子的意思起冲淡的作用,前面常跟‘不过’、‘无非’、‘只是’等词呼应。表示容忍,有勉强放过,暂时不深究的意思”。やめる。《西遊》:可有甚麼披掛,送他一副,打發出門去～。敖欽聞言,大怒道:我兄弟們,點…。

日本語訳

学道はその文章がよく書けているのを喜び、六等の第一席にし、その上で県において調査させた。県からは「彼は心の病気です。」という報告書が出た。宗師は「これは心の病ではなく、何かの悪行の報いだろう。」と言った。県から報告書が送られていることもあり、そこでそれ以上の追跡調査をやめてしまった。

原文

後來^[1]他父親死了,決不肯^[2]使^[3]棺木^[4]盛殮^[5],要光光的^[6]拉了出去。族中的人勉強^[7]入了材,他常要使狼頭^[8]打開來看。一日防^[9]他不及,連材帶凳^[10]推倒地下,把材底打開,臭得那一村人家怨天恨地^[11],要捉他去送官。他母親瞞^[12]了他,從新^[13]叫匠人^[14]灰布^[15]了,起了個四更^[16],頂門穿心槓子^[17]抬去埋^[18]了。

校注

[1] 後來:[名] “以后;属于随后的时间或时期的;继…之后出現的”その後。《水滸》5:敵他不過。後來倒難厮見了。不如罷手。～倒好相見。我們且自把車子上包裹打開, …。

[2] 肯:[助動] “许可;愿意”自分で…する、喜んで…する。《紅樓》60:芳官捱了兩下打,那裏～依,便抬頭打滾,潑哭潑鬧起來。

[3] 使:[動] “用”使用する。《水滸》70:邀上廳來。說言未了,只見階下魯智深～手帕包着頭,擎着鐵禪杖,逕奔來要打張清…。

[4] 棺木:[名] “棺材,或用来抬往坟地的架子,有时指棺材及棺材架”棺おけ。《醒世》57:分了東西,各自散去,也沒人替他料理個～。老婆子待要把那住房抵了與人,人都知…。

[5] 盛殮:[動] “把尸体装入棺材”人や動物の死体を棺桶に入れる。《水滸》3:里正,再三檢驗已了。鄭屠家自備棺木～,寄在寺院。一面疊成文案,一壁差人…。

[6] 光光的:[形] “裸露的”(棺桶も)何も無い。《二十》62:脚穿的是一雙粉底内城式京靴,頭上却是～沒有戴帽。[比較]ここでは、“裸葬”という「死に装束または棺無し」の埋葬を指す。但し、一般的な“光光(的)”は「丸裸、何も無い」を指す。

[7] 勉強:[副] “强迫,使人做他不愿意做的事”。いやいやながら。《西遊》60:驚,欲退難退,欲行難行,

只得戰兢兢，～答道：你是何方來者。敢在此間問誰。

[8] 狼頭＝榔頭：[名] “锤子” 金槌。《金瓶》58：他若是你的兒女，就是榔頭也椿不死。

[9] 防：[動] “戒备；预先作好应急的准备” 警戒する、警備する。《醒世》64：鄉里人家多有傾下白鐵鏢子，～那歹人的打劫，這只怕是常時收拾下的，老…。

[10] 連（材）帶（凳）：[接] “棺材和墊棺材的凳子都（推倒）”（棺）も（それを載せる台）も。《金瓶》41：不打緊，叫趙裁來，～大姐～你四個，每人都替你裁三件。

[11] 怨天恨地：[動] “泄愤” 大いに恨む。《野叟》149：兩妃道：親翁托病，滿天下人都信是真，想不敢瞞太君，各位親母也便知道，只苦了相好親友，憂愁悲憤，～而已。

[12] 瞞：[動] “隱藏实情，不让别人知道” 真相を隠す、騙す、騙す。《水滸》24：王婆哈哈的笑起來道：老身不～大官人說，我家賣茶，叫做鬼打更。

[13] 從新：[副] “重新” 新しく（…する）、もう一度（…する）。《金瓶》42：兩個聽的，進房中～說道：俺每頭裡不知是大姨，沒曾見的…。

[14] 匠人：[名] “旧称手工工人” 職人。《醒世》4：…官轎，另做油絹幃幔，與珍哥坐，從新叫～收拾，又看定了二月初十日起身…。

[15] 灰布：[動] “洒石灰” 石灰をまく。《醒世》57：二錢銀，買了一個松板棺材，裏外都替他～得堅固，叫人替他入了殮，掛了桶門簾，…。

[16] 四更：[名] “凌晨二点到四点左右” 午前2時から4時までぐらい。《醒世》40：着幾個油餅，拿着路上吃。睡了半夜，到～就起來梳洗，吃了飯。

[17] 頂門穿心槓子：“用顶门杠等粗大棍子穿过棺材抬走的最简单出殡方法” 一本の棒に棺を縛るといふ最も簡便な出棺方法。《醒世》80：狄希陳也沒着在意裏，且忙着小珍珠入殮，釘了材蓋，雇了四個人，兩條穿心槓子，叫他抬出彰義門外義塚內葬埋。

[18] 埋：[動] “葬” 埋める。《金瓶》10：太師女婿，夫人性甚嫉妒，婢妾打死者，多～在後花園中。

日本語訳

その後、彼の父親单于民は死んだが、单豹はどうしても棺桶の中に父親を入れようとはせず、逆に、棺無しで引っ張って行くという。一族の者が無理やり棺に入れても、单豹は金槌を使い棺桶をぶち壊そうとするのである。ある日、彼は棺を載せてある台ごと押し倒し、棺の底を壊し開けてしまった。遺体の腐敗臭が村全体を襲ったので、村人たちはひどく恨み、单豹を捕まえて、役所へ突き出そうとした。母親は息子を賺（す）し、もう一度新たに職人を呼んで棺に石灰を撒（#）かせ、午前3時頃起き、一本の棒に棺を縛るという最も簡便な出棺方法で担ぎ出し埋葬してしまった。

[注]

1) 分担は、1人200字～400字を担当し、校注構成メンバーの論議を経て何度も修正、最終的に植田均が調整した。したがって誤謬等の責任は全て植田均にある。大方の叱正を賜れば幸いである。